

## 叫びを聞くイエス

### [聖書] マルコによる福音書 4章 35～41 節

その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常に恐れて「いたい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

### [序] 今日共に礼拝に集められて

6月から一緒に礼拝を再開するようになりました。いわゆる密の状態にならないように6月の礼拝はご自宅と教会と半々で、とお願いしていましたので、今日久し振りに川越教会の中に入られたという方もいらっしゃると思います。まだ終息した訳ではありませんけれど、この数ヶ月の間、皆さんが守られたこと、本当に良かったです！ 今日こうしてご一緒に神様を讃美できることは大きな神様の恵みです。明さんも昨日一昨日と奏楽の練習をして下さって今日の礼拝に臨んで下さいました。私たちの讃美をリードして下さい有難うございます！

### [1] 湖に突風が吹いてきた

今日はご一緒味わいと思っている箇所は、マルコ福音書の4章の31節以下の物語です。この物語は現在の私たちの「今」と重なると思ったからです。いかがでしょうか、未知の**新型コロナウイルス**一つでこんなにも私たちの日常生活が脅かされてしまうということを、私たちは、あれよあれよと言う間に体験させられました。それは、まるでそれまで穏やかだった夜の湖に突風が起こり、私たちはそれに抗うことなど出来ない小さな舟に乗っていた、という事実を知らされるかのようです。

弟子たちにとって全く思いがけない「危機」が襲って来た訳です。向こう岸へと渡っていく夜の湖の船出です。その小舟に嵐が襲って来ました。どこにも逃げる

場所はありません。「必ず時が解決する」というようなことでもありませんから、この10数人の弟子たち（漁師も何人もいた）はもしかしたらこのまま沈んでしまうのではないかという恐れに取り付かれたでしょう。聖書はこの危機が襲ってきた時の弟子たちの姿を、「一群れ」と言いますか、「一人の人」のように描いていますね。弟子の中で特に誰が嵐に怯えたとか、誰がリーダーシップを取ろうとしたかというようなことは書かれていません。そして、その時眠っておられたイエス様にこのように言ったと記されています。38節です。

**「弟子たちはイエスを起こして『先生、わたしたちがおぼれてもかなわないのですか』と言った」。**一彼らは大きな恐れにすっかり捕らえられてしまいました。けれどもある方はこう言います。「**集団は、時に暴走します**」と。どういうことかと言うと、一人の人の中の恐れ、それは、集団になることや仲間がいることによってそれが助長されたり、膨らんだりするのです。それが「**集団パニック**」ですね。今度のコロナ危機で起こっていることを、私たちはどこかで俯瞰的と言うか、冷静に見つめることをしないと、「**恐怖**」という海の中に飲み込まれてしまうということがあります。弟子たちもパニックだったと思います。これは責められません。人間は弱いのです。しかし、そのパニックとは裏腹に、激しく波に翻弄されている小舟の艫（とも）の方で気持ちよさそうに(?)眠っている者がいる。イエス様ですね。

## [2] この方に叫んでいい

弟子たちは絶望的な状況の中で、穏やかに眠っておられる主イエス様に大声で叫びました。『先生、わたしたちがおぼれてもかなわないのですか』と。私はさっき「パニック」と言いましたけれども、人間はパニックになるのですね。けれどもその時に、**そのパニックの自分の心をどこに向けるのか**ということはとても大事なことはないかと思います。

実は今日の箇所は、この新型コロナウイルスが猛威を振るう最中の3月の下旬頃、カトリック教会のフランチェスコ教皇がパンデミック終息を祈るミサの中でメッセージを語られた時の聖句なのです。その時のメッセージの記録が紹介されていて、私も読ませて頂いたのですがとても力を与えられました。「バチカンニュース」のHPにあります。フランチェスコ教皇はこう言うのですね。**「弟子たちはイエスに対する信頼を捨てたわけではありません。それゆえ、彼らはイエスに訴えます。「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」。「かまわないのですか」という言葉に見られるように、弟子たちはイエスが彼らに対し無関心で彼らを放置していると思っています。わたしたちの家庭において一番辛いことの一つは、「あなたにとって、わたしのことなどどうでもいいのだ」という言葉を聞くことです。これ**

は心を傷つけ、動揺させる言葉です。この言葉はイエスにとっても心を動かすものだったでしょう。なぜならば、イエスほどわたしたちを思ってくださいる方はいないからです。実際、イエスはその言葉を聞き、落胆した弟子たちを救われました。」

—「信仰」とは「イエスを呼ぶこと」、そしてそれに尽きることなのではないでしょうか。私たちは「運命」という言葉を使いすぎなのかもしれません。しかしその言葉には因果応報的な無力さが潜んでいるような気がします。「もう自分はこうなってしまうんだ。この運命は変えようがないのだ」と。私も或る時は、今度のコロナ危機で、このまま世の終わりが来てしまうのではないか、これは人類への裁きなのか、とってしまったことがありました。しかしそれは不信仰的なことだったと今は思います。では、何が信仰的なことか。—祈ることです。弱さを抱え、あるがままに。「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」。—これは、イエスに向かう祈りです。この「祈り」を主イエスは聞き、起き上がり、この「滅び」の運命とも言える場所から弟子たちを救い出して下さいました。風を叱り、湖に静まれと命じることによってです。思えば、この船出を命じたのはイエスご自身ですよ。向こう岸へ渡ろう(4:35)と。このお方は、きっと湖が嵐に見舞われることをご存じだったのでしょ。その上で、嵐になっても眠っておられるのです。主イエスの中には神様の平安が支配していたのだと思います。「平安」というのは、何もないような穏やかさの中ではなく、人生の危機の中で、病、試練、孤独、そのような中で、「神、共におられる」という平安なのだと思います。

ですからフランチェスコ教皇はこのようなことも語られました。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」。信仰の一步は、自分が救いを必要とする者であると知ることです。わたしたちは自分だけでは何もできません、一人では沈んでしまいます。星を見つめたいにしえの航海者のように、わたしたちは主を必要としています。イエスをわたしたちのいのちの船の中に招きましょう。わたしたちの怖れをイエスに託しましょう。イエスがそれを打ち負かしてくださいるように。イエスは、たとえ良くない出来事をも善へと変える、神の力を持ち、わたしたちの嵐を鎮めてくださいます。神と共にいるならば、いのちは死すことはありません」。

主イエス様は、この疫病がもたらす不条理な悲しみの大きさも、神などいないのではないかという不信仰もご存じの方です。主は十字架という不条理、神様から切り離されると言う絶望、私たち以上の、いえ、**私たちが知り得ない闇**をこのお方は身に引き受けて下さいました。そしてこのお方は今、私たち一人ひとりに、また、信徒の群れである教会に対しても言われているでしょう。—「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」と。—「信じなさい。信じて良いのだよ。わたしこ

そあなたを赦し、愛してやまない神であると信じて良いのだよ。わたしが必ずあなたの人生を導くのだから」と言って下さっているのではないのでしょうか。

[結] わたしはあなたの「友」

最後に、昔キャロル・キングという歌手が歌って大ヒット曲となった「きみの友だち (You've got a friend)」という歌の歌詞を読ませて頂きたいと思うのです。これを、主イエス様からの招きの声として聞いて良いと私は思っています。

落ち込み、困り果て 思いやりが必要で 何かもうまくいかない時は  
目を閉じて私を思い出して。

そしたらすぐに君の元に現れて 闇夜だって明るくしてあげよう  
ただ私の名前を呼べばいい。ほらどこにいたって 何度でも君の元に駆け付けろよ  
冬でも春でも夏でも秋でも 呼んでくれさえすれば すぐに行く

頭上の大空が暗くなり 雲が立ち込め またあの北風が吹き始めても  
気を確かに持って。

私の名前を大声で呼べば すぐにドアをノックする音が聞こえるよ  
ただ私の名前を呼べばいい

とても冷たくなる人もいる中 友達がいると思えるって素敵じゃない  
彼らは君を傷つけ、そう、見捨てたり 放っておけば魂も奪ってしまう  
でもそうはさせないで。ただ私の名前を呼べばいい  
君には友達がいる (You've got a friend)

私たちはこのような時だから、いやどんな時も、私たちの“友”となって下さったイエス様を呼ぶのですね。私たちが発する訴え、祈りを主は待っていて下さいませ。そこに、主との新しい出会い、再会があるのです。今週も、神様に開かれた心を持って歩んで行きたいと思えます。「いったい、この方はどなたなのだろう」と。

お祈り致します。

愛する主よ、今日、皆と共に礼拝が捧げられたことを感謝いたします。あなたは「神」、私たちは限界ある人間、「被造物」です。そして、あなたは嵐の海の中でも眠ることが出来るお方です。私たちにもその神様の平安を与えて下さい。あなたは、私たちが滅びることを願う方ではなく、むしろ、私たちに主イエス様ご自身を与えて下さいました。これから行う晩餐式の中でも、主のご愛の確かさを示して下さいますように。今日、この場に来られなかった方々の上にも、主の支え

と恵みを注いで下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。